【調査・研究報告】

TOEIC 問題における
文法項目の説明方法について

長谷川　剛

0. はじめに

TOEIC（Test of English for International Communication）は米国の ETS（Educational Testing Service）によって，開発・制作される世界共通の英語試験で，2014 年には 150 カ国，約 700 万人が TOEIC を受験している。しかし，日本では，2014 年に 240 万人が受験しており，また隣国の韓国では，約 200 万人が受験しているので，日本と韓国で約 440 万人が受験していることになる。つまり，世界で約 700 万人の受験者のうち，約 63%は日本と韓国が占めることになる[(1)]。

筆者は日本の大学生向けの TOEIC 試験対策講座を担当することがあるので，日本で出版される TOEIC 用の参考書や問題集はできるだけ目を通すようにしている。すると，特に文法項目の説明方法にばらつきや誤りに気付くことがある。その原因として考えられるのは，参考書や問題集の著者が大学院はおろか大学で英語を専門に勉強したことがなく，TOEIC で高得点を取ったという事実だけで執筆の機会が与えられていることがあると思う。膨大な量の TOEIC 参考書や問題集が出版されているが，まさに玉石混淆という状態で，学習者が自分で適切な参考書や問題集を選択するのは極めて困難である[(2)]。

本稿では，特に 2 つの文法項目の説明方法について考察を試みたい。1 つは before, after が前置詞なのか接続詞なのかという問題である。これは分詞構文において before, after が先頭に付いた場合，特に問題になる。もう 1 つは仮定法現在の文で that 節内の動詞が原形になる現象の説明方法である。日本では，そして韓国でも，助動詞 should が省略されていると説明されることが多いが，これは誤りである。

1. Before, After は前置詞なのか接続詞なのか

筆者が大学生向けの TOEIC 試験対策講座を担当する際に，英文法の参考書として学生に推薦するものとして，小石裕子（2015）『改訂版 TOEIC TEST 英文法　出るとこだけ』（アルク）がある。文法項目の要所を 173 ページの中に収めている点が良いと思う。しかし，問題点が無いわけではない。「従位接続詞＋分詞／形容詞」のセクションで，「while / when / after / before ＋ -ing はアリ」（p. 94）としたあとで，次のような説明をしている。

従位接続詞 before / after ＋ -ed は NG（「主

語＋本動詞」が必要）

前置詞 before / after ＋ -ing は OK

The packages have to be weighed before packed. ……×（従位接続詞）

The packages have to be weighed before packing. ……○（前置詞）（小石 p. 96）

著者は before packing の before を前置詞だと判断しているが，なぜ前置詞なのか，その説明はない。さらに，次の練習問題の解説において，次のような説明をしている。選択肢はそれぞれ(A) unless (B)until (C)after (D)therefore である。

All Klimt Internet Services' contracts are for five years (-----) otherwise agreed upon at the outset.

接続詞(A)unless, (B)until の後では「主語＋be 動詞」の省略がよく起こる。ここでは慣用表現 unless otherwise -ed（他に～されていなければ）となる(A)が正解。(C)after が接続詞なら「主語＋be 動詞」の省略は起こらないし，前置詞なら後ろに名詞か動名詞が必要なので不適切。（以下略）（小石 p. 106）

著者の説明の前提になっているのは， before, after は接続詞が付いた分詞構文に使われることはなく，前例の before packing は「前置詞＋動名詞」である，という考えである。それでは，次のような while, unless, though と before, after は何が違うのだろうか。著者はその説明をしていない。

Workers should not drink while [they are] using computers.

Adults are not allowed unless [they are] accompanied by a child.

Injuries at work, though [they are] rare here, are often preventable.（小石 p. 95）

小石が参照したと推測できる文献の中に，江川泰一郎（1991）『英文法解説』（金子書房）がある。これは筆者も学生時代から参照しているもので，英語授業で文法項目を説明する際に活用している。江川は「接続詞を加えた分詞構文」の説明において，「接続詞を加えたものとも見られるし，接続詞と分詞との間の「主語＋be 動詞」の省略とも見ることもできる」と述べている。

While staying（＝While we were staying）in Paris, we fell in with a party of Swiss tourists.

When speaking（＝When he speaks / is speaking）English, he often makes grammatical mistakes.

While resembling（＝While he resembles）his father in appearance, he has inherited much from his mother in character.（江川 p. 345）

さらに江川は「副詞節における省略」の説明において，「主語＋be 動詞の省略は，時・条件・譲歩などの副詞節に見られる」と述べ，次のような例文を挙げている。

When (I was) a child I had a habit of blinking my eyes.

I often get good ideas while (I am) shaving.

They began to dance as if (they were) charmed by the music.（江川 p. 403）

このように，時・条件・譲歩などの副詞節に，接続詞の付いた分詞構文があることを指摘しているが，before, after に関しては次のように述べている。

「時」の接続詞でも after や before に動詞の -ing 形が続くと，その ～ing は動名詞で，after と before は前置詞になる。
Give me a kiss before going to bed（＝before you go to bed).（江川 p. 405）

しかし，英文法の権威である江川も「なぜ before, after は前置詞なのか，なぜ -ing 形は現在分詞でなく動名詞なのか」を説明していない。

一方，小石や江川とは異なる論調の文献として，綿貫陽（2000）『徹底例解ロイヤル英文法・改訂新版』（旺文社）がある。これは大学入学試験のために英語を勉強する高校生に支持され，英語教員も参照する英文法書である。綿貫は分詞構文の説明において，次のように述べている。

After having finished his homework, Jack went out to play baseball with his friends. のような文では，after には接続詞も前置詞もあるので，前置詞と解すれば having は動名詞である。（綿貫 p. 522）

このように綿貫は after を前置詞と断定せずに，もし前置詞と解釈するならば having は動名詞になると述べている。

さらに，これも小石や江川とは異なる論調の文献であるが，比較的新しい文法書として，宮川幸久・林龍次郎［編］（2010）『要点明解アルファ英文法』（研究社）がある。

文に対する分詞の意味を明確にするために，分詞の前に接続詞が用いられることがある。この場合，〈接続詞＋主語＋be 動詞＋現在分詞〉の〈主語＋be 動詞〉が省略されたものとも考えられる。
He made an accidental discovery while experimenting with a new material.
After setting the time to see a movie the next Sunday, they went home.
I don't have the confidence to persuade him, though having said that.
If used correctly, lights can make a room look larger.
Wait here until told to come in.（宮川幸久・林龍次郎［編］p. 545）

このように，この文法書では After setting の After を接続詞，setting を現在分詞と解釈している。他方，江川は after, before を前置詞と断定している。両方とも，その判断の根拠となる説明が不足しているので，どちらか片方に軍配をあげるのは不可能である。

筆者は文法解釈に行き詰まった場合，最終的な拠り所としているのは Quirk et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*（Longman）である。これは 1779 ページに及ぶ，20 世紀最大かつ最良の英文法書と評されているものである。筆者の場合，大学院の英文法の授業の教科書がこれであった。そして Quirk et al.（pp. 1005–6）には，次のような記述がある。

After, before, and *since*（subordinators with finite clauses）differ from subordinators such as *when* or *while* in that they are followed by *-ing* clauses but not by *-ed* clauses

or verbless clauses:

He took a shower (*before / after*) *returning home.*

Since moving here, I have felt more relaxed.

These three also differ from the subordinators listed above [*although, as if, as though, even if, if, once, though, unless, until, when* (*ever*), *whether* ... *or, while, whilst*] in that they allow a subject in the *-ing* clause:

Since my coming here, life has become more comfortable for my parents.

The difference suggests that *after, before,* and *since* are better classed with prepositions such as *on* and *through* (both of which permit a subject in the *-ing* clause) rather than subordinators:

He took a shower *on returning home.*

Through my coming here, life has become more comfortable for my parents.

この説明の中に重要なポイントは 3 つある。(1) After, before が when, while 等と異なるのは，動詞の -ing 形は従えるが -ed 形は従えない。(2) After, before が when, while 等と異なるのは，動詞の -ing 形に主語を付けることができる。(3) この相違点は，after, before は従位接続詞としてではなく on, through 等のような前置詞として分類する方が良いことを示唆している。

冒頭にあげた小石の記述をもう一度見てみよう。「従位接続詞＋分詞／形容詞」のセクションで，「while / when / after / before ＋ -ing はアリ」(p. 94) としたあとで，次のような説明をしていた。

従位接続詞 before / after ＋ -ed は NG（「主語＋本動詞」が必要）

前置詞 before / after ＋ -ing は OK

The packages have to be weighed before packed. ……×（従位接続詞）

The packages have to be weighed before packing. ……○（前置詞）（小石 p. 96）

小石は Quirk et al. (pp. 1005–6) にある(1)のポイントはカバーしている。しかし，(2)と(3)のポイントをカバーしていないので，なぜ packing の前の before が前置詞なのか不明である（小石の場合は，なぜ packing が現在分詞でなく動名詞であるのかの説明が必要だった）。さらに，Quirk et al. が after, before を前置詞と断定していないことも重要である。江川 (p. 405) のように前置詞と断定することは正しくないと思う。根拠を述べて「従位接続詞としてよりも前置詞として分類する方が良い」とすべきだろう[(3)]。

2. 仮定法現在は should が省略されているのか

日本で TOEIC を実施する「国際ビジネスコミュニケーション協会」が発行する『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 2』の TOEIC 練習テスト(2) Reading Test (Part 5) Question 138 に次のような問題がある。

It is imperative that computer passwords (-----) kept confidential.

この文に対して，選択肢(A)were (B)be (C)being (D)had been があり，この問題に対する公式問題集の解説は次のようになっている。

〈It is＋形容詞＋that ～〉の文では，形容詞に imperative のような「必要性」,「重要性」などを表す語が来ると， that 以下の部分で should が省略され，動詞の原形がそのまま使われることがある。よって(B)の be が適切。（p. 129）

他方，韓国で TOEIC を実施する YBM Korea TOEIC Commission が発行する公式問題集『토익 정기시험 기출문제집 LC＋RC 1200』（TOEIC 定期試験既出問題集 LC＋RC 1200）の 기출（既出）Test（05）Reading Test（Part 5）Question 125 に次のような問題がある。

The senior project manager will be on-site next Thursday and has requested that the editors (-----) him in his office at 9 : 30 A.M.

この文に対して，選択肢(A)meet (B)met (C)have met (D)will meet があり，この問題に対する韓国公式問題集の解説は次のようになっている。

해설：ask, require, request, insist, suggest, recommend 처럼 주장, 제안, 요구의 동사 뒤에오는 that 절에는 should 가 생략되어 동사원형을 쓴다. 따라서 정답은 (A)meet 이다.（p. 170）

これを翻訳すると「解説：ask, require, request, insist, suggest, recommend のように主張，提案，要求の動詞の次の that 節では，should が省略され，動詞原形を使う。したがって正解は(A) meet である」となる。したがって，日本でも韓国でも公式問題集の解説においては，should が省略されていることになっている。

それでは前節で言及した小石裕子（2015）『改訂版 TOEIC TEST 英文法　出るとこだけ』（アルク）はこれをどのように解説しているだろうか。

One of the conditions included in the contract requires that the price of materials (-----) renegotiated in five years.

この文に対して，選択肢(A)be (B)is (C)would be (D)are があり，これを次のように解説している。

要求・主張・提案を表す動詞の後の that 節では should を省略するルールを基に，原形の(A) be を選ぼう。（小石 p. 77）

このように小石は「要求・主張・提案を表す動詞の後の that 節では should を省略するルール」があると述べている。そして今回も残念ながら，なぜ should を省略するのか，その理由を述べていない。しかし，前節とは異なり，この理由を説明することは絶対に不可能である。なぜなら，この that 節に should は最初から存在せず，省略されているのでもないのだから。

小石が参照したと推測できる文献の中に，Raymond Murphy（2012）*English Grammar in Use*（Cambridge University Press）がある。これは大学の英文法授業でテキストとして使用されることもあるが，筆者の場合は社会人向けの英語クラスで教科書として使用したことがある。Raymond Murphy は Unit 34 **should**（p. 68）の説明において，次のように記述している。

［A］ You can use should after: **insist**, **recommend**, **suggest**, **demand**, and **propose**.
□ I insisted that he should apologise.

□ Doctors recommend that everyone should eat plenty of fruit.
□ What do you suggest we should do?
□ Many people are demanding that something should be done about the problem.

Also "It's important/vital/necessary/essential that … should …"

□ It's essential that everyone should be here on time.

[B] You can also leave out should in the sentences in Section A. So you can say:

□ It's essential that everyone be here on time.（= … that everyone should be here）
□ I insisted that he apologise.（= … that he should apologise）
□ What do you suggest we do?
□ Many people are demanding that something be done about the problem.

This form（be/do/apologise etc.）is called the subjunctive.

この説明の中で特に重要なのは You can also leave out should in the sentences in Section A. という記述である。この文だけ読むと，「通常は should があるが，場合によっては should を省略することもできる」とも解釈できる。この誤解を解く 1 つのヒントになるのが，例文において apologize が apologise というイギリス英語の綴りになっていることである。実は，Raymond Murphy（2012）*English Grammar in Use*（Cambridge University Press）はイギリス英語の文法を解説した本なのである。

ところで Raymond Murphy は William R. Smalzer と共著で 2009 年に *Grammar in Use Intermediate: Self-study reference and practice for students of North American English*（Cambridge University Press）というアメリカ英語の文法を解説した本も出版している。彼らは Unit 32 Subjunctive（I suggest you do）（p. 64）の解説において，次のように記述している。

[A] Study this example:

Lisa said to Mary, "Why don't you buy some nice clothes?"

Lisa suggested that Mary buy some nice clothes.

In this example, buy is the subjunctive. The subjunctive is always the same as the base form（I buy, he buy, she buy, etc.）

[B] We use the subjunctive after these verbs: **demand**, **insist**, **propose**, **recommend**, and **suggest**.

□ I insisted he have dinner with us.
□ The doctor recommended that I rest for a few days.
□ John demanded that Lisa apologize to him.
□ What do you suggest I do?

We also say, "It's essential/imperative/important/necessary/vital（that）something happen."

□ It's essential that everyone be at work by 9 : 00 tomorrow morning. No exceptions.
□ It's imperative that the government do something about health care.

前掲書と大きく異なるのは should に関してまったく言及していないことである。もちろん should を省略しているとも述べていない。なぜイギリス英語の解説では should が省略できるよ

うに書いてあるのに，アメリカ英語の解説には should が登場しないのだろうか。

前節と同様に，小石は江川泰一郎（1991）『英文法解説』（金子書房）も参照したと推測できる。江川は「仮定法現在」の説明において，次のように述べている。

> 次の用法は《米》では普通である。《英》でも次第に使われるようになっているが，should を使うほうが多い。
> 提案・勧告・要求などを表す動詞に続く that 節で：*advise, ask, demand, insist, move, propose, recommend, request, require, suggest.*
> Mr. Chairman, I propose that we take a vote on that next week.
> Cf. I propose that we should take a vote on that next week.《英》
> I suggest (that) we not jump to conclusions. 〈not の位置に注意〉
> In case of my death, I desire that this insurance be paid to my wife.（江川 p. 250）

江川の説明の「《米》では普通である。《英》でも次第に使われるようになっているが，should を使うほうが多い」だけを読むと，that 節内で動詞の原形を使う「仮定法現在」は新しい用法で，アメリカでは広く使われ，イギリスでも使われ始めていると解釈できてしまう。江川だけでなく，綿貫陽（2000）『徹底例解ロイヤル英文法・改訂新版』（旺文社）も「仮定法現在」の説明において，次のように記述している。

> 仮定法現在は，条件文などでは今は古い慣用的表現か，形式ばった格調高い文体でしか用いられないが，次に示すような that 節中では，特に《米》で多く用いられる。この用法は《英》でも見られるようになってきているが，《英》では should を用いることも多く，仮定法現在は改まった文体で用いられることが多い。（綿貫 p. 557）

ここでも綿貫の言う「この用法は《英》でも見られるようになってきている」だけ読むと，that 節内で動詞の原形を使う「仮定法現在」は新しい用法のように解釈できてしまう。しかし，綿貫の言う「条件文などでは今は古い慣用的表現か，形式ばった格調高い文体でしか用いられない」という部分は重要である。そもそも「仮定法現在」とは何なのか。

まず，仮定法現在は条件文などで用いられる。どれも古風で形式ばった表現で，アメリカ英語に多く，イギリス英語では動詞原形の前に助動詞 should が用いられる。

> If any person be found guilty, he shall have the right of appeal.
> Whatever be the reasons for their action, we cannot tolerate such disloyalty.
> The President must reject this proposal, lest it cause strife and violence.

また，仮定法現在は要求や提案を表す文の that 節内において用いられる。これもアメリカ英語に多い用法で，イギリス英語では動詞原形の前に助動詞 should が入る。

> They recommend that this tax be abolished.
> It is appropriate that this tax be abolished.
> We were faced with the demand that this tax be abolished.

そして動詞原形だけを使う仮定法現在と助動詞 should を使う用法のどちらが古い用法かというと，もちろん仮定法現在である。アメリカ英語の用法は should が省略されているのではなく，古い動詞原形だけを使う用法が残っているのである。これに対して助動詞 should を入れる用法は新しいものである。筆者はこのことを大学時代に英語史の授業で学んだ。

英語の歴史を古期英語（Old English），中期英語（Middle English），近代英語（Modern English）に分けると，古期英語は 450 年頃から 1100 年頃までのアングロ・サクソンの時代，中期英語は 1100 年頃から 1500 年頃までのノルマン人征服後の時代，近代英語は 1500 年頃から今日までの時代になる。仮定法（接続法ともいう）は古期英語において広く用いられていた。ところが中期英語の時代になると，仮定法に代わって直説法や助動詞を用いる傾向がでてきたが，まだ仮定法も広く用いられていた。古期英語と同様に中期英語でも，要求や提案を表す文の従属節内において動詞原形が仮定法現在として用いられた。ところが近代英語になると，仮定法に代えて直説法や助動詞を用いるほうが多くなった。イギリス英語において，仮定法現在の代わりに should を用いるのが主流になったのは近代英語以降だと推測できる[4]。

つまり，アメリカ英語の仮定法現在の文は should が省略されているのではなく，古期英語から存続する古い表現であり，イギリス英語の should の用法や直説法は中期英語から広まり近代英語に主流になった新しい用法なのである[5]。

The employees have demanded that the manager resign.《米》仮定法現在

The employees have demanded that the manager should resign.《英》

The employees have demanded that the manager resigns.《英》直説法

日本や韓国の公式問題集だけでなく，市販の TOEIC 問題集や参考書の多くが「仮定法現在の that 節には should が省略されている」と記述しているが，これは誤りである[6]。

3. おわりに

本稿では TOEIC 問題における文法項目の説明方法について，(1)before, after は前置詞なのか接続詞なのかと，(2)仮定法現在に should は省略されているのか，という 2 点について考察した。TOEIC 問題集や参考書の著者が説明不足であること，文法事象を誤解していることが明らかになったと思う。日本における TOEIC 受験者は今でも増加傾向にある。これからも多数の問題集や参考書が出版されると予測されるが，同時に出版物が淘汰され洗練されることも期待したい。

《注》

（1） 日本で TOEIC を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）が発行する「TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2014」によると，日本における TOEIC 受験者は，2011 年に 227 万人，2012 年に 230 万人，2013 年に 236 万人と年々増え続けている。しかし，韓国で TOEIC を運営する YBM Korea TOEIC Commission によると，韓国における TOEIC 受験者は，2011 年に 211 万人，2012 年に 209 万人，2013 年に 207 万人と年々減少傾向にある。この背景については Sean Chung（2014）“TOEIC: No More Gold Standard in Assessing English Proficiency,”（http://koreabizwire.com）が参考になる。

（2） 比較的評判の良いとされる著者の TOEIC 参考書にも明らかに誤りと気付くものがある。例えば，成重寿（2014）『TOEIC TEST 英文法 スピード

マスター』Ｊリサーチ出版（p. 74）には次のような記述がある。

・接続副詞：文と文を接続する。文法的には文全体を修飾する副詞である。
We have already worked 12 hours, so let's call it a day.

このsoは副詞ではなく，等位接続詞である。

（３） 筆者が2002年に出版した『TOEIC Test「速効！」語法・文法ワークブック』マクミラン（p. 53）では，California officials said they are beefing up security at the state's suspension bridges after (-----) a threat to destroy one of them. という文に，選択肢Ⓐreceive Ⓑreceiving Ⓒreceived Ⓓreceiptがある問題で，次のような解説をした。

空欄の前のafterは前置詞と接続詞の両方の用法があります。接続詞ならば，after they received a threatとすることも可能ですが，選択肢の中にthey receivedはありません。1つ考えられるのは，接続詞の残された分詞構文と解釈し，現在分詞のreceivingを選択することです。あるいは，このafterを前置詞と解釈し，前置詞の目的語になる動名詞のreceivingを選択することもできます。どちらの解釈でも正解はⒷになります。

このように接続詞と前置詞の両方の解釈ができる可能性を残しておいた。

（４） 仮定法（接続法）の歴史に関しては，大槻博・大槻きょう子（2007）『英語史概説』燃焼社（pp. 177-82）を参考にした。また，これは私見であるが，フランス本国のフランス語よりもカナダのケベック州で使われるフランス語のほうが古いこともこれと関係していると思う。英語でもフランス語でも，新大陸に移民した人々のほうが古いものを大切にしているようだ。

（５） 仮定法現在の説明に関しては，Quirk et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language*（Longman）を参照した。例文も同書（pp. 155-58, 1012-14）から抜粋した。

（６） 仮定法現在のthat節にはshouldが省略されていると誤解している人が多いので，南出康世［編］（2014）『ジーニアス英和辞典』大修館書店（p. 1928）には，次のような記述がある。

［「should＋動詞の原形」と仮定法現在］米英を問わず仮定法現在（動詞の原形）を使う方がふつう。仮定法現在はshouldの省略とよく言われるが，歴史的にはまったく逆で，shouldは後に加えられたもの。

このように「shouldの省略」は「都市伝説」のようなものになっている。

参考文献

江川泰一郎（1991）『英文法解説・改訂３版』金子書房.

大槻博・大槻きょう子（2007）『英語史概説』燃焼社.

小石裕子（2015）『改訂版 TOEIC TEST 英文法 出るとこだけ』アルク.

国際ビジネスコミュニケーション協会（2007）『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 2』IIBC.

国際ビジネスコミュニケーション協会（2015）「TOEIC プログラム DATA ＆ ANALYSIS 2014」（PDF）IIBC.

成重寿（2014）『TOEIC TEST 英文法　スピードマスター』Ｊリサーチ出版.

長谷川剛（2002）『TOEIC Test「速効！」語法・文法ワークブック』マクミラン.

南出康世［編］（2014）『ジーニアス英和辞典・第５版』大修館書店.

宮川幸久・林龍次郎［編］・向後朋美・小松千明・林弘美［著］（2010）『要点明解アルファ英文法』研究社.

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘（2000）『徹底例解ロイヤル英文法・改訂新版』旺文社.

Chung, Sean (2014) "TOEIC: No More Gold Standard in Assessing English Proficiency," (http://koreabizwire.com) Posted on April 8, 2014.

Murphy, Raymond (2012) *English Grammar in Use: A self-study reference and practice book for intermediate learners of English,* (Fourth Edition) Cambridge University Press.

Murphy, Raymond with William R. Smalzer (2009) *Grammar in Use Intermediate: Self-study reference and practice for students of North American English,* (Third Edition) Cambridge University Press.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language,* Longman.

YBM Korea TOEIC Commission (2014)『토익 정기시험 기출문제집 LC + RC 1200』(TOEIC 定期試験既出問題集 LC + RC 1200), YBM.